月），上野赤城山（飯柴永吉）。

〔分布〕 樺太。

50） ホソミノススキゴケ **Dicranella cylindrica** Noguchi, sp. nov.（第31圖）

Dioica. Planta fusco-viridis inferne atrovirens nitiduscula. Caulis ad 8 mm altus simplex densiuscule foliosus. Folia sicca erecto-patentia ± homomalla flexuosa, inferiora e basi lanceolata sensim subulatum canaliculatum attenuata ca 1 mm longa, superiora sensim multo majora ad 6 mm longa e basi semi-vaginante oblonga raptim elongatum canaliculatum setaceam attenuata ± incurva vel ± homomalla vel recurva, marginibus ± involutis apice parce serrulatis caeteris, integris, costa potius indistincta basi ca 80 μ lata percurrente, cellulis medianis linearibus parietibus tenuibus 40～65×4～8.5 μ, marginalibus brevioribus, alaribus et inferioribus anguste rectangularibus parietibus fuscis 35～60×8～10 μ. Bracteae perichaetii internae e basi alte vaginante raptim elongatum setaceam canaliculatum attenuatae ad 7 mm longae, marginibus involutis. Seta flavescens laevis sicca ± flexuosula 1～1.5 mm longa 0.09～0.12 mm crassa. Theca erecta e collo oblongo-cylindrica symmetrica, sicca regularis haud plicata, fusca 1.7×0.55～2×0.6 mm, cellulis exothecii irregulariter rectangularibus vel subquadratis, annulus distinctus. Peristomii dentes lanceolati ad 2/3 longitudinem fissi, superne lutescenti dense papillosi, inferne rubiginosi dense striolati, ad 0.4 mm longi. Sporae globosae vel subglobosae fuscae dense papillosae 20～25 μ in diam. Operculum e basi conica longe oblique subulatum 1.3～1.5 mm altum. Calyptra cucullata lutescenti-fusca laevis 1.8～2.5 mm longa.

〔生態〕 石英砂質土上に生ずる。

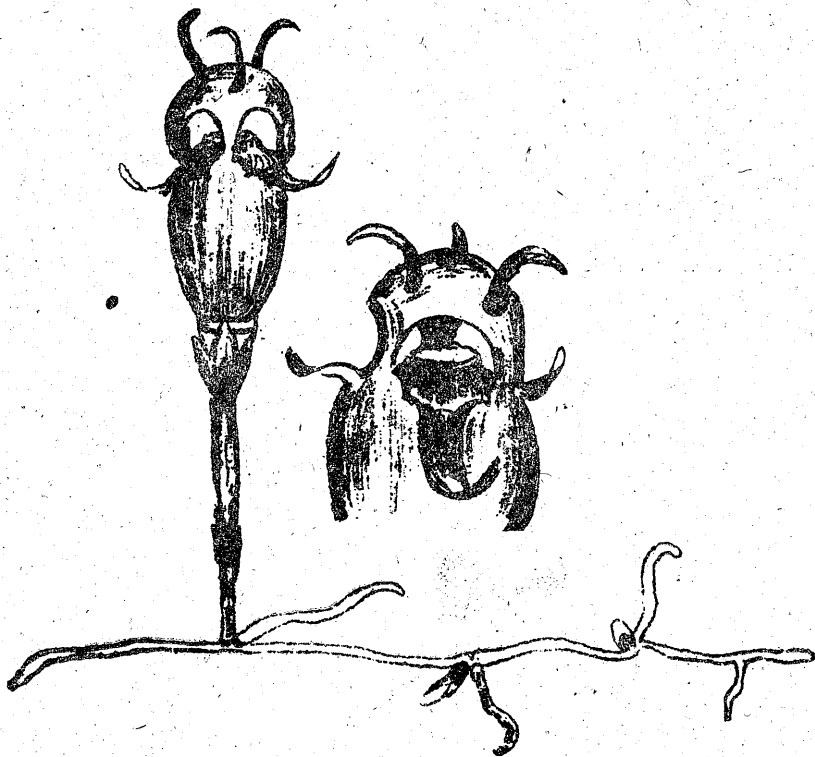
〔產地〕 本州：安藝宮島（野口，no. 8350－基準標本，1933年6月）。

D. heteromalla に近似の種と思われるが，葉は頂部以外は緣齒なく，蒴胞は相稱形で *Ditrichum* 屬のように長味を帶びているので著しい。

○阿部近一氏發見の“奇怪なる植物”（本田正次・津山尙）

近着の德島縣博物同好會發行の“阿波の自然 Nature of Awa vol. 1. no. 1”なる謄寫刷雜誌に阿部近一氏が“奇怪なる植物？”の表題の下に次の挿入圖と共に說明文「本植物は昭和18年6月21日大龍寺山麓の岩屋道の樹陰落葉…（以下謄寫不良のため10字不明）…發見されたものである。白色極めて軟弱なるもので半寄生のものとも考へられるが根莖は圖の通りである。恐らく新植物ではなからうか。（スケッチブック中より）」を登載して居るのを見た。若しこれが眞實ならば最近本邦の植物界に於ける重要なる發

見と言はねばなるまい。

このものは阿部氏の圖及び記事から判斷するに腐生植物 (Saprophyte) であつて熱帶地方に多く見られる所のヒナノシヤクヂヤウ科 (Burmanniaceae) の一種であるに違ひ

なく，その中の Thismieae なる群に屬するものであらう。この群の中には Griffith によつて Burma 東南部の Tenasserim 州の植物によつて *Thismia* 屬を設立されて氏以來，近緣の *Sarcosiphon* Blume, *Geomitra* Beccari, *Bagnisia* Beccari, *Ophiomeris* Miers, *Myostoma* Miers 等の諸屬が熱帶各地で相次いで發見設立された。これらの諸屬の獨立性に就ては諸學者の意見の分れる所でこれらの凡てが各獨立屬として今日認められてゐないのは勿論であるが，さりとてこれらを凡て *Thismia* 屬に合一することも亦無理がある程，形態上の變化範圍の著しく廣いものである。阿部氏の植物は Borneo で發見された *Geomitra clavigera* Beccari の範疇に最も近いものである事は疑問のない所であるが，尙重要な點でこれと異つてゐる。尙 Beccari 氏の報告した同屬の他の一種は餘程異るため和蘭の Jonker 氏の如きはこれを *Geomitra* から分離して

ゐる位で，Thismieae の諸屬の再編成は相當に入り組んだ仕事である。

阿部氏の圖に就て註釋的の説明を試みて見ると次の様になる。萼片狀に見えるものは苞であり，その上の横線は子房構造の一部が透視されたものであり，その上部は花冠の筒部，舌狀の三片は外花蓋片，ドーム狀構造は先端が菱形に擴がつた內花蓋片3片がドームの頂上から 120° をなして放射する3本の線に於て融合したものであり，その先端の擴大部の背面から角狀突起が反捲してゐるものである。最後の所は或は內花蓋片の中肋及びこれに隨伴する組織が內花蓋片面から分れてその背面に離在してゐると言つた方が正しいかも知れない。尙ドーム下の圓盤狀のものは花冠筒部への入口であり，花冠筒部の上方內面から，內，上方に向つて擴がる輪狀構造がこの入口を狹めてゐるのである恐らく廣い葯隔を有する6個の雄蘂が花冠筒部內面上方にあるであらうし，先端が3岐する短大な柱頭がその下方，中央に位置するであらう。以上の説明は阿部氏の植物に近緣と見られる諸種の花部構造からの類推によつてなされたものである。この植物の地下莖が横に長く匐ひ，且これが分枝の可能性を有するらしいことは注目されてよい性質であると思はれる。尙この植物が再び同地點で發見される蓋然性は割合に少いと想像されるが，今その理由を詳細に述べる紙面を有しない。ともかくこの植物は阿部氏によつて圖示及説明された範圍內のみで判斷しても，かゝる形質の複合に於て Thismieae 群中の新種なることは明かである故，實物標本について更によく調べて見たいものである。さもなくしてこれを記載發表することは差しひかへたい。

Thismieae 群に屬するものが溫帶に發見された例は北米 Chicago に於て唯一度唯一箇處に於てのみ，New Zealand 及 Tasmania に於て同一種に屬する數個體が數箇處に於てのみである。今日迄の所東南 Asia 方面に於ては Philippine がこの群の分布の北限であつたが，かくなれば內地に於ても更に他の箇處でも發見されるかも知れない。とにかく阿部氏今回の發見は眞に稀少なる機會をつかんだ點で高く評價さるべきである。

（追記） 最近赤澤時之理學士から「阿波の自然」vol. 1 no. 2 が寄贈されて來た。この中には同氏の「燭臺草科（新稱）の一新種について」なる報告があり，上記の奇怪なる植物に對して *Glaziocharis* の新種がラテンの記相文を伴つて發表されてゐる。同氏は“花絲，花柱等（花部の？……註）の內部構造は不明，（標本一個なる故解剖し得ず）他日明かにし記載を補いたいと思ふ。”と附加し，若し新屬であつた時の名もあらかじめ用意した。

Glaziocharis は Brasil で唯1度1個所で發見された植物に基いて發表されたものでドーム上の附屬體は長く垂下する。Ijonker 氏によれば，*Geomitra* 等が3個の柱頭を有するのに對して，この屬は唯1個であり，且それに3個の翼を有する點で異ると言ふ。Schlechter 氏の言ふ雄蕊が離在か否かはあまり强調出來ないらしい。これらの花冠の內景の點は問題の植物に對しては今の所判斷の材料にならないが，地理分布上の理由及びドーム上の附屬體の特徴によつて小生等はやはり *Geomitra* に近緣のものと想像する。何れにしても赤澤氏の學名發表は，標本の解剖に基いたものではなく不確實であり又文獻的にも不充分な所があるし，配布範圍の狹い謄寫版刷雜誌の上にそれがされたことは出版上の priority を主張する根據にもならない。我々は赤澤氏或は他の研究者の完全な標本を基にして然るべき機關を通じての正當な（legitimate）發表を期待してやまない。